

神戸市長田区の縁日・地蔵盆と地域の交流の拡がりに関する調査研究

A Role of Ennichi and Jizobon in Expanding Interaction in a Local Community - Results of a Social Network Survey in Nagata Ward, Kobe City

小谷仁務*・横松宗太**

Hitomu Kotani*・Muneta Yokomatsu**

This study examines the potential role of local festivals in enhancing communication among residents in a local community. The study focuses on two traditional local festivals, Ennichi and Jizobon, in Nagata Ward, Kobe City. We conduct a questionnaire survey to understand how these festivals form new interactions in the community, and how people enjoy communication and develop relationship based on them. The results indicate that Ennichi and Jizobon have mainly connected residents of almost homogeneous characteristics who had not had chances to meet without the festivals and have often formed strong ties among them that are expected to work during disasters. Based on the finding that organizers of the festivals have played a role of hubs of the network, the study further considers how to achieve sustainable development of the festivals and the social network in the local community.

Keywords: Traditional Festivals, Personal Networks, Ennichi and Jizobon, Nagata Ward, Kobe, Questionnaire Survey
伝統行事、パーソナルネットワーク、縁日・地蔵盆、神戸市長田区、アンケート調査

1. はじめに

地域社会における住民間のつながり（以下、「社会ネットワーク」と呼ぶ）は、日頃の地域の治安や住民の健康、災害時の助け合いなどの基礎となる¹⁾⁻²⁾。しかし、昨今、職場が遠くなって同僚が近所に住むことが少なくなったり、会社の同好会やインターネット上の交流サイトで娯楽の相手をつくるようになっていたりして、居住地域での交流が減少していると言われている。

そのような中で、地域の祭りは、数少ない、地元で交流する年中行事の一つである。よって地域の祭りは、それがなければ出会わなかった地域の人たちと出会うきっかけを提供する。このとき、職場やサークルが目的や経験、嗜好等を共有した人たちの集まりであるのに対して、地域の祭りは職業や世代が異なる人々を繋げる機能をもつのではないかと考えられる。祭りを盛況にするための協働を通じて、属性の異なる人々がコミュニケーションを開始し、その交流が私生活でも継続するというケースが多く生み出されてきたのではないと思われる。本研究ではそのような仮説を検証する。

一方、災害時の「共助」も、現在の数少ない属地的な共同活動の一つである。東日本大震災での人々の助け合いは、社会に「絆」というキーワードを生み出した。社会科学の分野では、東日本大震災での「絆」の特徴は、被災地外に住む知人など、日常生活での交流が少ない関係（「弱い紐帯(weak ties)」）の間で、厚い支援や励まし、助け合いが沸き起こったことという指摘もなされた³⁾。その一方で、人々が震災によって家族の大切さを再認識したことを伝える記事も多い⁴⁾⁻⁵⁾。本研究では、地域の祭りによって生まれた人間関係がどのような「強さ」をもっていて、災害時にどのように生きてくると人たちが認識しているのかを調査する。

ところで、地域社会の問題が論じられる際に、「社会ネットワーク」という言葉や視点が用いられる頻度と較べると、実際に社

会ネットワークの実態を数量的に把握した研究は少ない。理由の一つは調査の難しさにある。プライバシーの侵害や、特定の相手との関係を記述することに伴う心理的負担の問題が介在するからである。本研究では、それらを極力小さくし、回答しやすいアンケート票の設計を試みる。

以上の問題意識の下に、本研究では神戸市長田区の JR 新長田駅南部の商店街周辺（以下、「新長田」と呼ぶ）の「縁日」と「地蔵盆」を対象にしたアンケート調査を実施する。そして得られた回答の記述統計結果を示すとともに、縁日と地蔵盆の社会ネットワーク形成への影響に関する上記の仮説や疑問を検討する。

2. 調査の概要

2-1. 本調査の主な焦点

本研究は、神戸市長田区の伝統行事である縁日と地蔵盆を通じて拡がる社会ネットワークの性質を明らかにすることを目的とする。社会ネットワーク理論の分野では、人種や年齢や性別、職業等の属性が似ている者同士が集住したり、好んで交流したりする現象がモデル化の対象となることが多い。そのような現象は Homophily と呼ばれている⁶⁾。それに対して、筆者らは、人は本来的に、相手との知識や経験、発想の違いを楽しむ趣向を備えているはずであるという視点に立つ。多くの人が、外国人やお年寄りと交流をするとき、自分が知らない世界の話に触れて知的興奮を感じるものである。そして、もしそのような異文化交流がそれほど簡単には観察されないとしたら、それは交流を始めるきっかけがないからだと考える。日常生活において、新しい交流のきっかけとなる機会は、確かに同質的な相手との方が多い。

地域の伝統行事では、仕事や家族構成、年齢などに関して様々な背景をもつ住民が一同に会する。そこでの行事を盛況にするための協働はコミュニケーションのきっかけとなりうる。そして、徐々に行事以外の話をするようになると、自分にはない相手の知

* 非会員 京都大学工学研究科 (Graduate School of Engineering, Kyoto University)

** 正会員 京都大学防災研究所 (Disaster Prevention Research Institute, Kyoto University)

識や経験談を聞いて面白さを覚え、またコミュニケーションの機会をもちたいと思うだろう。行事とは独立の私的な交流が始まる可能性もある。以上のように、本研究では「縁日・地藏盆をきっかけに、異なる背景をもつ人同士のつながりが新たに生まれ、両者の違いが大きいほど、相手とより親密な交流をする可能性が高い」という仮説を立てて検証する。また、縁日と地藏盆から生まれる新しいつながりの価値の一つである、災害時の共助の行動についても調査する。そこでは、どのような付き合いをしている相手との間で助け合いが起こりそうであるかを質問する。さらに、行事における協働の形態とネットワーク形成の関係を調べることを目的に、行事における役割についても質問する。縁日や地藏盆の場合、役割には全体の運営を担う幹事役や、店や展示を出す役、客の役がある。どのような役割による参加がその後の私的交流へと発展しやすいのかに着目する。

2-2. 対象地域と行事

神戸市の新長田の商店街は、阪神淡路大震災後のしばらくの間、賑わいを喪失した。そのため新しく建設された巨大なアーケードは無用の長物と見なされ、復興政策は批判を受けた⁷⁾⁻⁹⁾。店主と買い物客のおしゃべりが減少している実態も筆者らの調査で明らかとなった¹⁰⁾。その一方で、震災後、商店街では新しいモニュメントの建設や行事が相次いで開催されるなど、地元のさまざまなステークホルダーが地域活性化のための取り組みを重ねてきた。そこでは新たに商店街の間の協力や、地元の外国人住民や東北被災地の住民との交流が生まれた。

同時に、伝統行事である縁日や地藏盆も綿々と続いている。本研究では伝統行事が生み出す交流に目を向ける。それによって新長田の復興の取り組みを、より多角的に理解できるようになるものとする。

縁日は、新長田の各商店街で7月末に催される。各商店街で運営の仕方は様々で、商店街店主や自治会、婦人会、学校関係者など多様なステークホルダーによって運営されているところもある。

地藏盆は、8月23日周辺に新長田の各商店街周辺にある50体ほどの地藏尊において行われている。地藏尊に線香をあげてお参りし、帰りにお菓子をもらう「お接待」と呼ばれる風習があり、子どもたちを中心に地域の人を楽しませている¹¹⁾。運営には、保存会や自治会、婦人会など多様な主体が参画しているところもある。

2-3. 調査手法

長田区在住者を対象に、2通りの方法でアンケート調査を行った。1つ目の方法として、2014年11月23日(日)の神戸マラソンの開催にあわせて調査を実施した。マラソン応援企画イベントにアンケート回答のためのブースを2カ所(本町筋商店街と六間道商店街)設け、行事の参加者や観覧者に声をかけて、アンケートへの回答を依頼した。

2つ目の方法として、2014年11月に、新長田まちづくり株式会社(TMO)、アグロガーデン神戸駒ヶ林店、神戸市立地域人材支援センターに調査協力を依頼し、各組織・団体を通じて、関連する住民にアンケート票を配布してもらった。回答されたアンケート票は、後日、各組織・団体を通じて郵送回収した。

2-4. 調査項目

社会ネットワークについての質問方法や調査項目についてはこれまでいくつか研究の蓄積がある¹²⁾⁻¹⁵⁾。それらを基に、回答者の縁日と地藏盆への参加状況や、その行事を介して形成された被験者個人の交流関係(personal network data)、その交流の客観的情報(相手の属性や付き合いの形など)と主観的情報(「災害

【表-1】知り合いになった人の属性、付き合いの形、災害時の行動予想についての質問

縁日・地藏盆で初めて知り合った長田区の住民の中から、最大5人思い浮かべ、つながりが強いと思う人から順に「Aさん、Bさん・・・、Eさん」と呼ぶこととします。						
AさんからEさんの詳細についてそれぞれ該当する番号を選んで下の表に記入してください。						
	付き合いの形	付き合いの頻度	災害時の行動	性別	年齢	...
Aさん						
Bさん						
Cさん						
Dさん						
Eさん						

◇ 付き合いの主な形	◇ 付き合いの頻度	◇ 災害時の相手の行動予想
1. 直接個人的に会っている	1. 週に1回以上	あなたの住む地域で大きな地震が起きたとします。幸い、この地域の電話やメールはつながっています。
2. 手紙・メール・電話	2. 半月に1回程度	Aさん、Bさん、...、Eさんが全く被災していないとしたら、そのときAさん、Bさん、...、Eさんはそれぞれ、
3. 偶然会った時だけ挨拶やおしゃべりする	3. 月に1回程度	どのような態度・行動をとると思いますか。
4. SNSでつながっている	4. 2~3ヶ月に1回程度	1. 直ぐに駆けつけ、あなたの安否確認をしたり、避難のサポートをしてくれたりする
5. その他の目的や手段	5. 半年に1回程度	2. 直ぐに電話やメールで、あなたの安否確認をする
	6. 年に1回程度	3. 数日以内にあなたの安否確認をする
	7. 2~3年に1回程度	4. 安否は知りたいと思っているが、自ら連絡することはしない
	8. 忘れた・わからない	5. 連絡をしない
	9. その他 ()	6. わからない
		7. その他

が起きたとしたら相手はどう対応すると思うか」など) 等について調査項目を設定した。

回答者と知人との関係や知人同士の関係を問う際には、表-1 に示すように、行事をきっかけに知り合いとなった人のうち、「つながりの強いと思う順に、『A さん、B さん、・・・、E さん』と呼ぶこととします。」という質問の仕方をし、匿名性を保つ工夫をした。また、災害時における知人との関係を問う際には、回答者に大きな地震が起こった仮想的状況を想定してもらい、「(あなたに対して) A さん、B さん、・・・、E さんはそれぞれどのような(タイミングや方法によって、避難のサポートや安否確認の)行動をとると思いますか。」というかたちの質問を設計した。つまり相手を行の主体とした。なぜならば、もし逆に「あなたは A さん、B さん、・・・、E さんにどのようにコンタクトをとりますか」という質問をしたとすれば、結果的に回答者に A さんから E さんの 5 人の間で優先順位を付ける作業をさせてしまうことになりかねず、心苦しい気持ちにさせてしまったり、正直な回答ができなかったりすることになるからである。そのような心理的負担を抑えるために、回答者を受動的立場においた仮想的状況を採用することとした。また、アンケート票全体に亘って、答えにくい質問には答えずに、次の質問に移っていただくようお願いをした。

さらに、回答者の知り合いの間の知り合い関係を把握するために、図-1 を提示して、知り合い同士を線で結んでもらう方法を考案した。

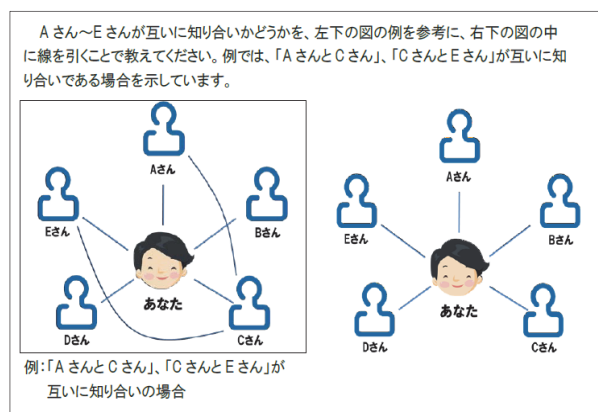
以下に、調査項目の概要を示す。

(1) 各行事での参加状況

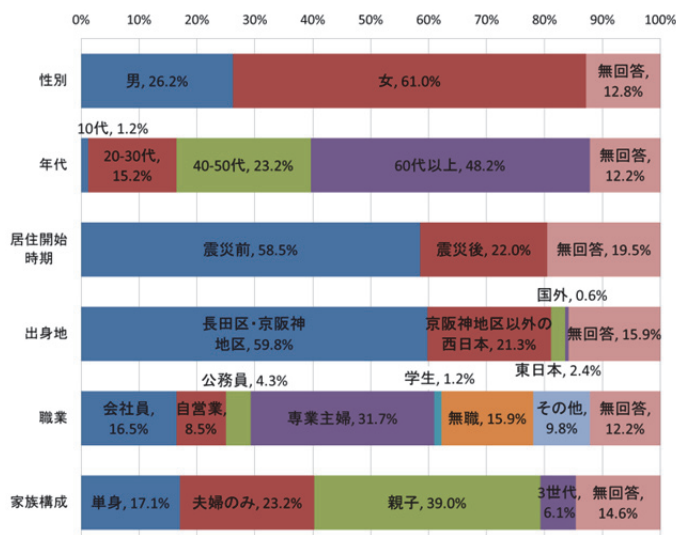
回答者が参加している地域の行事に関して、どのような参加の仕方をしているか(全体の運営・準備に携わる「幹事」側か、出店者及び出展者として参加する「出展者」側か、出展・出店を訪れ、楽しむ「客」側か)、参加年数、その行事に携わっている時間について問う。(以下、出店と出展をまとめて「出展者」と表記する。)

(2) 行事を通して知り合いになった人について

参加している行事を通して知り合いになった人がいるか、いればその人数、その知り合いになった人との付き合いの形(直接連絡を取って会う、メールなどで連絡を取る、など)、また、それぞれの人数について問う。



【図-1】知り合い同士の結びつきに関する質問



【図-2】回答者の属性

(3) 知り合いになった人の属性、付き合いの形、災害時の行動予想

(2)で知り合いになった人の中で、より親密な交流がある人を 5 人まで列挙してもらい、各人の属性(性別、年代、職業、出身地など)、付き合い方、交流の頻度・時間、災害時に予想される相手の行動(すぐに安否を確認する、安否確認しない、など)を問う。質問内容の詳細を表-1 に示す。

(4) 知り合い同士の結び付き

(3)で挙げた人々について、自分の知り合い同士が互いに知り合いであるかどうかについて問う。質問内容の詳細を図-1 に示す。

(5) 被験者の属性

被験者の性別・年代・職業(会社員/自営業/公務員/専業主婦/学生/無職/その他(自由回答))、長田区での居住開始時期、出身地、世帯の家族構成を問う。

3. 分析結果

3-1. 回答者の属性

街頭調査を通して、個人属性のみしか書かれていなかったり、長田区在住者でなかったりした無効回答(4人)を除くと、本町筋商店街では41人、六間道商店街では46人の回答を得た。また、郵送回収を通して、新長田まちづくり株式会社(TMO)の運営委員会の役員11人(長田区居住者)、アグロガーデン従業員6人、地域人材支援センターに関わる住民60人から回答を得た。街頭と郵送での回収で合計164人の回答を得た。回答者属性として、性別、年代、居住開始時期、出身地、職業、世帯の家族構成の分布を図-2に示す。

3-2. 行事への参加と社会ネットワークの関係

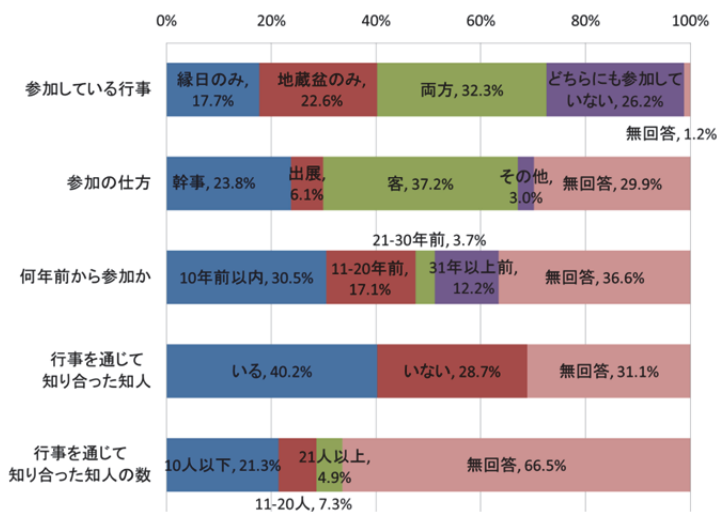
a) 行事への参加状況と知人数

回答者の参加している行事、参加の仕方(幹事/出展者/客として参加)、参加開始時期、行事を通して知り合いになった人の有無、その人数の回答の分布を図-3 に示す。また、行事に参加している人と参加していない人の知人数の平均値と中間値を表-2 に示す。図-3 より、回答者の 7 割ほどは縁日および地藏盆のど

ちらか一方には参加しており、縁日および地藏盆が長田区住民にとって身近な存在であると考えられる。また、4割程度が行事で知り合いを作った経験があり、表2より、行事に参加している人の方が、知人数が多いことがわかる。以上より、地域行事は、身近な存在であり、多くの人の人間関係の形成を促す役割を果たしているといえる。

b) 知り合う場と親密さの関係

ここでは、行事で知り合う相手か、行事以外で知り合う相手かによって、付き合い方に違いが生じるか否かに着目する。行事参加者が、行事で知り合った相手と行事以外で知り合った相手のそれぞれについて、付き合い方毎に何人と付き合いを続けているのかを調べた。なお、各付き合い方で付き合いを続けている人数が1人以上の回答を分析に用いた。結果を表3に示す。行事で知り合って関係を続けている人数の平均値は、「付き合い方」に関



【図-3】回答者の行事参加状況

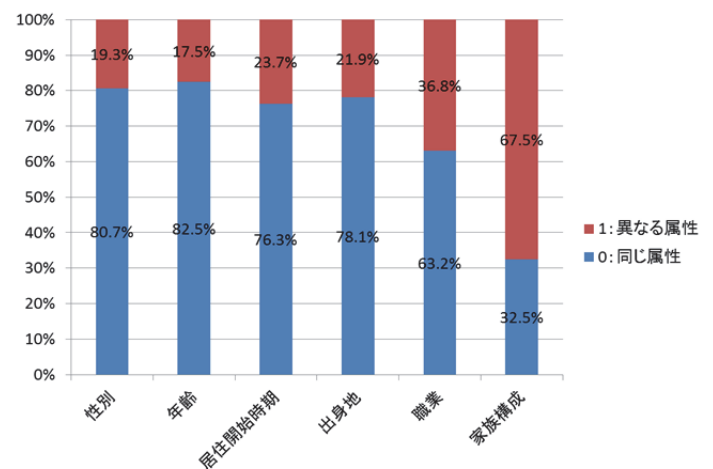
【表-2】行事参加者と不参加者の知人数

	行事参加者	行事不参加者
回答数	87	30
平均値	26.3人	19.1人
中間値	15人	6人

して多い順に、「道端などで偶然会えば、挨拶やおしゃべり」、「直接個人的に会っている」、「手紙・メール・電話で連絡」、「SNS (Social Networking Service) ⁽¹⁾」であり、その中間値は付き合い方によって大きな差はない。一方で、行事以外で知り合って関係を続けている人数の平均値を調べると、「付き合い方」に関して多い順に、「SNS」、「道端などで偶然会えば、挨拶やおしゃべり」、「直接個人的に会っている」、「手紙・メール・電話で連絡」であり、その中間値は「道端などで偶然会えば、挨拶やおしゃべり」、「SNS」が他の付き合い方より多い傾向にある。つまり、行事参加者にとって、行事で知り合うか、そうでないかによって、付き合い方の傾向が違い、行事で知り合った相手とはより親密な付き合いをしている可能性がある。

c) 行事で知り合う知人との関係

次に、行事で知り合う知人がどういう相手なのか、その相手とはどのように交流を続けているのかを分析する。「回答者」と「その回答者が行事で知り合った知人」とのペアの中で、回答者の属性（性別、年齢、居住開始時期、職業、家族構成）と行事で知り合いになった知人の属性が全て回答されていたペアを抽出した（ペア数 N=114）。「回答者」と「その回答者が行事で知り合いとなった知人」の各属性が同じであればその項目は0、異なれば1として分析を行った。例えば、回答者の属性が「男性、60代、震災前から居住、無職、単身世帯」であり、行事で知り合いとなった知人の属性が「男性、20代、震災後から居住、会社員、単身世帯」であれば、そのペアは、「性別0、年齢1、居住



【図-4】ペアの属性の違い

【表-3】行事参加者の付き合い方毎の知人数（行事で知り合った知人と行事以外で知り合った知人の比較）

	付き合い方	直接個人的に会っている	手紙・メール・電話で連絡	道端などで偶然会えば、挨拶やおしゃべり	SNS
行事で知り合った知人数	回答数	27	14	44	7
	平均値	14.5人	12.3人	15.1人	7.3人
	中間値	6人	5人	6人	5人
行事以外で知り合った知人数	回答数	54	32	66	10
	平均値	10.4人	9人	15.9人	25.8人
	中間値	5人	5.8人	10人	7.5人

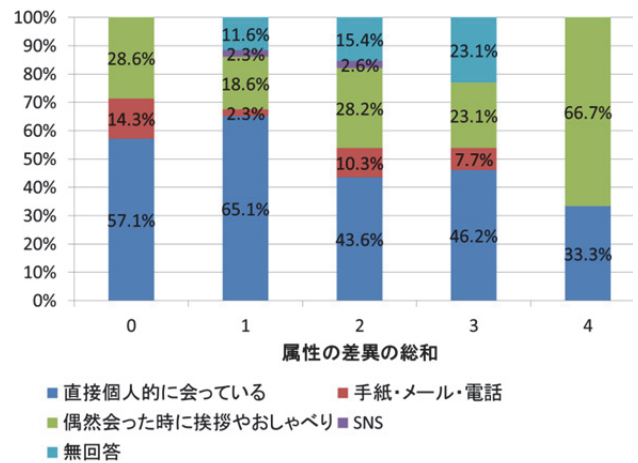
開始時期1、職業1、家族構成0」と変換される。この集計の結果が図4である。この図から分かるように、関係が続いているペアは、家族構成以外の項目で、同じ属性をもつ傾向にある。つまり1章や2-1で設定した仮説に反する結果が得られたことになる。調査結果に基づくと、縁日や地藏盆は、家族構成以外の属性については、自分と似ている人との新たな出会いのきっかけとなっていると考えられる。

さらに、6つの各属性の差異（0か1）の総和をとり（前述の例では、差異の総和3）、属性の差異の大きさが、付き合いの主な形と頻度へ与える影響を調べた。結果を図5と図6に示す。なお、差異の総和5の回答が1つ、差異の総和6の回答が2つあったが、それぞれ回答数が少ないため、分析では取り除いた。図5と図6から、ペアの属性の差異の総和が1のとき、「直接個人的に付き合っている」、あるいは、「半月に1回程度」以上会っているペアの割合が最も大きいことがわかる。また、その割合は、差異の総和が1より大きくなるほど減少する。0になるときにも減少する。したがって、異質性が大き過ぎず、しかし完全には同質的でない属性をもつペア同士が親密な付き合いを続けている可能性がある。

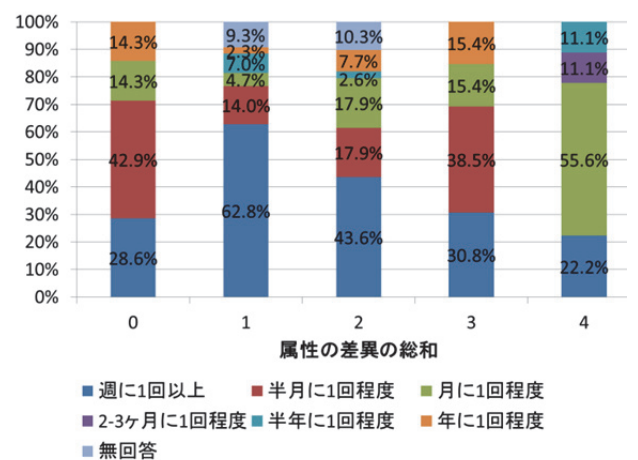
数少ない異質な属性が家族構成であるときには、以下の二通りのケースを考えることができる。第一に、縁日や地藏盆で出会う二人が、互いの家族構成の違いに起因した経験の相違に興味をもって交流しているケースである。例えば、現在は核家族で子どもと暮らす30代女性が、将来親が病気がちになったときには同居を始める可能性を考慮しているとき、既にそのような家族構成で暮らしている30代女性から興味深く話を聞くような関係を想像することができる。第二のケースは、当初の仮説とは反対の「縁日・地藏盆は、似た経験や知識をもつ人同士を結び付ける」という解釈を徹底したものである。すなわち、二人は性格において「似たもの同士」だったにも関わらず、家族構成の違いゆえに、これまで学校のPTAや子どものスポーツクラブ、お年寄りの会合、病院などで出会うことがなかった。そして縁日・地藏盆が二人に出会う機会を提供した、という場合である。

d) 災害時の行動

縁日と地藏盆から生まれる社会ネットワークが災害時に果たす機能について分析する。図7は、行事で知り合った相手との「交流の仕方」と「災害時の相手の行動の予想」との関係を示す。また図8は、行事で知り合った相手との「交流の頻度」と「災害時の相手の行動の予想」との関係を示す。図7から、「付き合い方」が「直接個人的に会っている」、「手紙・メール・電話」、「偶然会った時に挨拶やおしゃべりをする」の順に、「直ぐに駆けつけ、安否確認や避難のサポートをしてくれる」と「直ぐに電話やメールで安否確認をしてくれる」の回答が占める割合が大きい。したがって、個人的に face-to-face の付き合いをしている相手ほど、直ぐに自分の安否確認やサポートをしてくれると予想する傾向にある。一方で、図8からは、付き合いの頻度と災害時の相手の行動の予想との間に明確な関係は読み取れなかった。こ



【図5】属性の差異の総和と付き合い方の関係



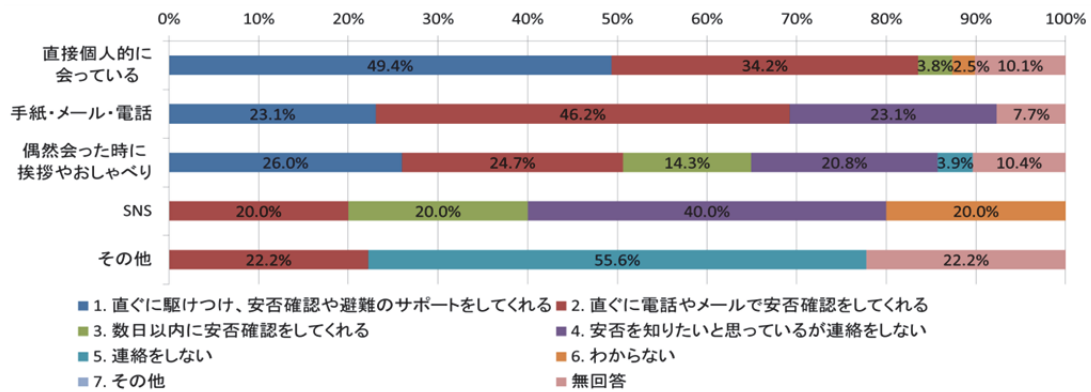
【図6】属性の差異の総和と付き合いの頻度の関係

のことから、行事で知り合った相手とは、付き合いの「頻度」よりも、個人的で face-to-face の「付き合い方」の方が、災害発生時の安否確認や救援を予想させる因子となっている可能性がある。したがって、災害時に駆けつけてくれることを予想できる「紐帯」の性格は、付き合いの「頻度」においては「弱く(weak)」てもよいが、「付き合い方」においては、直接会う関係くらいには「強く(strong)」なければならないということである。換言すると、SNSによるインターネット上の交流のみでは、緊急時にも、やはり電話やメールで遠隔のコミュニケーションをとるくらいまでが期待されることになる。

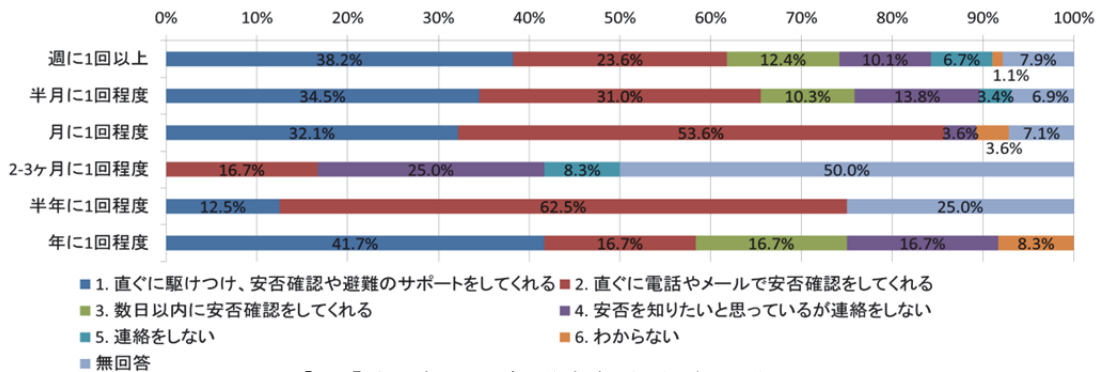
3-3. 行事での役割と社会ネットワークの関係

a) 個人の属性と行事での役割

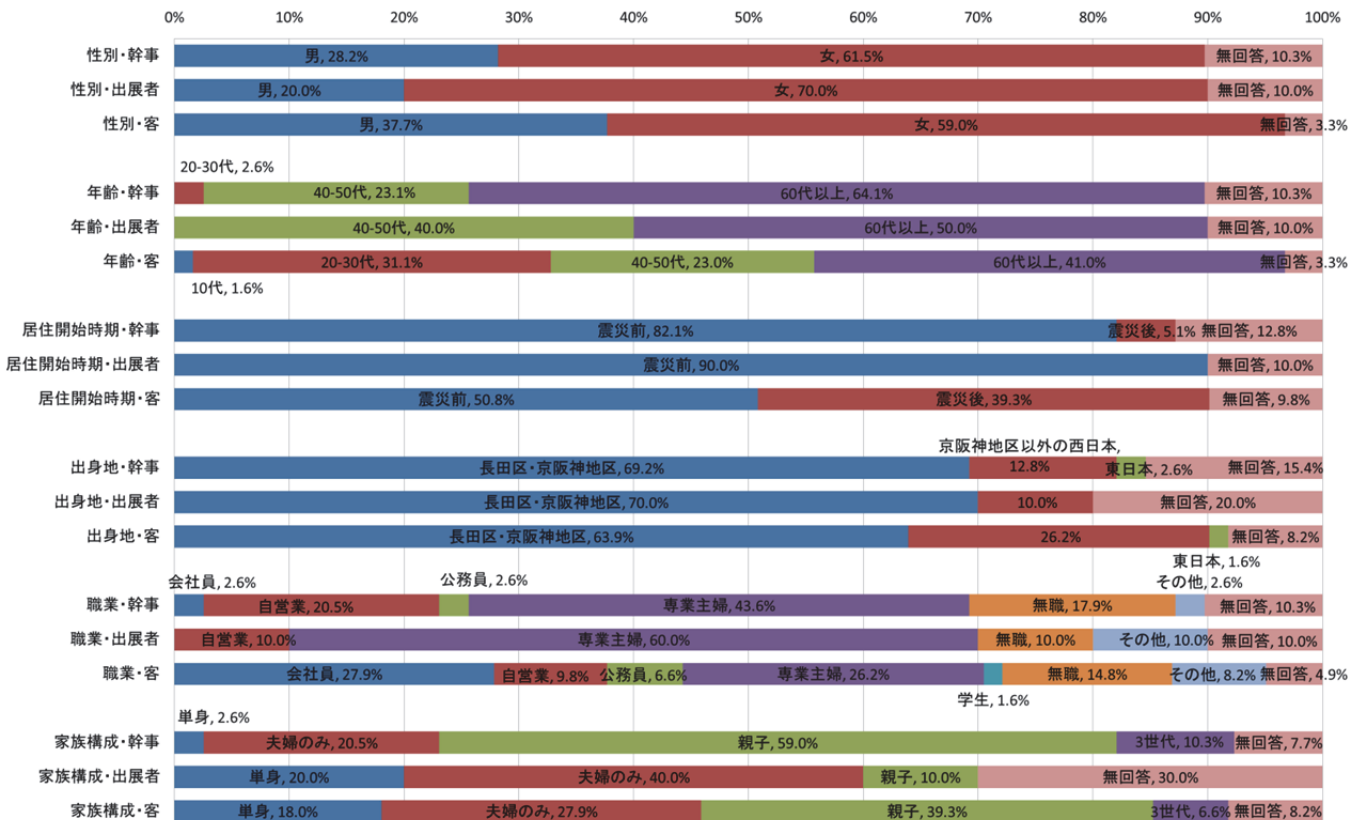
本節では、行事の中で参加者がもつ「役割」の視点から社会ネットワークの構造を分析する。本研究では、行事における役割として「幹事」と「出展者」と「客」の3つを考える。それぞれの役割をもつ回答者数は、順に、N=39、10、61であった。



【図-7】 交流の仕方と災害時の相手の行動予想の関係



【図-8】 付き合いの頻度と災害時の行動予想の関係



【図-9】 各役割をもつ回答者の属性

まず、これら3つの役割がどういう属性をもつ人たちが担われているのかを示す。この結果が図-9である。特徴として、幹事は、60代以上、震災以前からの居住者、主婦、自営業者、親子世帯の人たちを中心に構成されている。一方、出展者は、震災以前からの居住者、主婦、夫婦のみの世帯の属性をもつ人たちが中

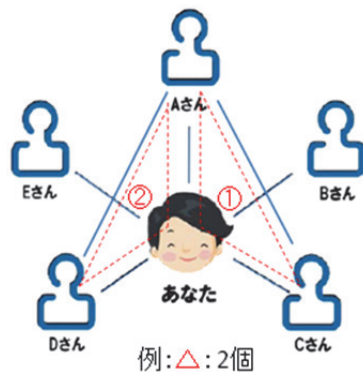
心となる。そして客は、20-30代、震災以後からの居住者、会社員、単身の属性をもつ人たちが中心となる。

b) 役割が知人数とクラスター性に及ぼす効果

先に示した役割によって、交流にどのような違いが生まれるのかを分析する。まず、知人数に着目する。各役割を担う回答者

【表-4】各役割をもつ回答者の付き合い方毎の知人数

	祭りを通じて知り合った知人数		
回答者	幹事	出展者	客
回答数	26	6	17
平均値	14.4人	20人	7.7人
中間値	10人	10人	5人



【図-10】クラスター集計例

(この場合、クラスター数は2つ)

の、「行事に参加し始めてから知り合った知人数」の平均値と中間値(1人以上の回答を対象)を求めると表-4に示す結果を得た。平均値と中間値共に、幹事と出展者の方が、客より大きな値を示した。

次に、「クラスター」に着目する。社会ネットワーク理論において、ある個人の知り合い同士が知り合いであり、3者が全て結ばれる三角形の関係は「クラスター」と呼ばれる。クラスターは共有知識の形成を促し協調問題の解決に寄与したり、情報の伝達でネットワークの頑健性を高めたりする効果があると言われている^{16)・17)}。また、Colemanはクラスターが社会関係資本(ソーシャルキャピタル)に与える正の影響を指摘している¹⁸⁾。そこで、調査項目(4)の回答結果より、図-10のようにクラスターを抽出し、役割毎のクラスター数の平均値と中間値を調べた。この結果を表-5に示す。知人数と同様、平均値と中間値共に、幹事と出展者の方が、客より大きな値を示す傾向にある。

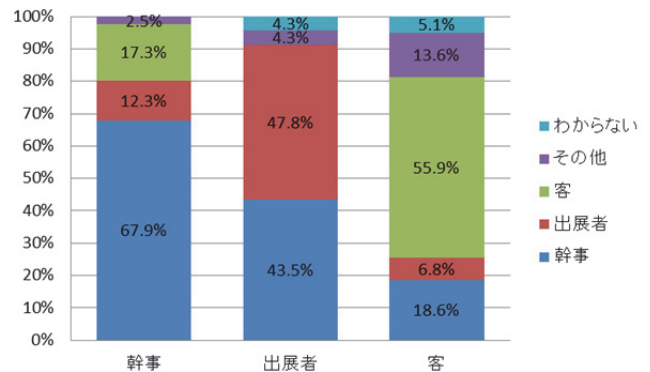
以上から、行事の運営において中心的な役割を担う幹事や出展者といった人たちが、多くの知人を作り、その知人同士も知人である関係(クラスター)を多くもつ傾向にあるといえる。

c) 役割間でのネットワーク

最後に、役割間の交流にはどういった特徴があるかを調べる。ある役割をもつ人がどういう役割をもつ人とつながっているかを分析した。図-11に結果を示す。図の横軸は回答者の役割を表している。なお、回答者が幹事、出展者、客であるペアの数は順に、N=81、23、59であった。図より、ペアの数は「幹事-幹事」が最も多く、次に「客-客」のペアが多いことがわかる。一方、同じ役割同士のつながり以外では、「幹事-出展者」と「幹事-客」のペアが多い。幹事はさまざまな形で行事に参加する人たち

【表-5】各役割をもつ回答者のクラスター数

回答者	幹事	出展者	客
回答数	21	4	13
平均値	5	5.3	2.9
中間値	3	4.5	3



【図-11】役割間での交流

とつながりをつくっている。

上述のように、幹事は主として、主婦や自営業者、60代以上によって構成されている。自営業者とは主として商店街の店主であろう。主婦や店主は、他の属性の者より買い物や地域活動が多い。とりわけ商店街での活動が多いものと思われる。今後は一層、商店街の空間を有効に利用した行事運営が期待される。

一方、幹事や出展者の中には、若手が少ない。客は、主として20-30代の人たちや、震災後に居住を開始した人たちが構成されている。今後は20-30代の人たちに、より中心的な役割を任せることも重要である。

4. 新長田における伝統行事と社会ネットワーク

震災後、新長田では地域コミュニティの復興のためにさまざまなイベントが企画されてきた。復興のシンボルとしてのモニュメントの建設や、新長田にゆかりをもつ漫画文化や食文化にちなんだ祭りなどである。それらを通じて商店街の間の協力や、地元の外国人住民や東北被災地の住民との交流が生まれている。このように、震災後に始まった多くのイベントは、多様なバックグラウンドをもつ人々を結びつけている。それが可能となった理由は、参加者の間で「地域の復興」という絶対的な目的が共有されたからであろう。それぞれが「地域の復興」のために役割を果たすイベントが、異なる属性をもつ人々の交流のきっかけとなったのである。

そのような意味では、企画された祭りやプロジェクトでなくとも、復興過程そのものがイベントの一面をもっていたと解釈することもできる。筆者らが行ったインタビュー調査において、丸五市場の店主は「震災、丸五市場では井戸水が出たため、復旧するまでの断水期間は地元の人に井戸水を分け与えた。それが縁となり今でも最良にしてくれる人もいる。」と語っている。

それに対して、本研究では、縁日と地藏盆が、主として属性が比較的似ている人同士の交流を拓いているという結果を得た。こ

のような縁日と地藏盆の機能は、震災後の新しいイベントの機能との補完関係において理解されるべきであろう。無論、縁日と地藏盆には、震災前から、さらには数世代に亘って引き継がれている主旨や価値がある。震災後に縁日・地藏盆と新しいイベントとの間で機能の再配分が行われたと言いたいわけではない。むしろ、地域に次々と新しい文化が生まれる時期においてこそ、古い文化を継承する機会の重要性は高まる。そのことと類似して、震災後に、より多様な国や地域、世代をつなぐ社会ネットワーク形成が指向される中で、似ている人同士をつなぐ縁日と地藏盆の現代的価値は評価されなければならない。

なお、本章の考察は試論の域を出ないものである。それらを精緻に検証することを新たな課題と考える。

5. おわりに

本研究では、神戸市長田区の伝統行事である縁日と地藏盆が地域の人々の交流に与える影響をアンケート調査によって分析した。分析の結果、縁日や地藏盆は、主として属性が比較的似ている人同士の交流を拓くことが明らかになった。そして、新しい交流が、個人的に直接会うような付き合いに発展する場合、その交流関係は災害時に避難のサポートをするような助け合いを生み出す可能性をもつことが示された。さらには、両行事の中では幹事役がさまざまな役割の参加者と交流していることが判明した。

本研究は、今後いくつかの重要な課題を残している。第一に、4章に記したように、伝統行事と新しい行事の補完関係について厳密に検証する必要がある。第二に、3-2.c)では、ペア間の異質性の大きさを評価する際に、各属性の差異の総和を用いた。つまり各属性に同等の重みを与えて集計をした。今後はより適切に社会的距離を考慮した異質性の評価方法を開発する必要がある。第三に、アンケートの質問内容を、より理解しやすく、短い時間で応えられるように改善していく必要がある。

謝辞: アンケート調査の実施にあたっては、新長田まちづくり株式会社の宍田正幸様、神戸市立地域人材支援センターの向恵子様、アグロガーデン神戸駒ヶ林店関係者様、西村鶏肉店の西村政之様、富士呉服店の増井宏行様に多大なるご協力を頂きました。また、アンケートの回答者の皆様には、本研究の趣旨をご理解頂き、快くアンケートに回答して頂きました。そして、平成26年度京都大学大学院講義キャップストーンプロジェクト・災害リスクマネジメント研究室提供課題の参加者である浦部真治さん、欧彦さん、儀久昂さん、清水明彦さん、富永真裕さん、萬保怜美さん、宮澤拓也さん、村瀬翔さんには、アンケート調査の実施と回答票の集計を中心にご協力いただきました。皆様に深く御礼申し上げます。

補注

(1) Social Networking Service (ソーシャルネットワーキングサービス) とは、人と人とのつながりを促進・サポートする、コミュニティ型の会員制のサービス、あるいはそういったサービスを提供するウェブサイトのことである。

参考文献

- 1) ロバート・D. パットナム (柴内康文訳) (2006), 「孤独なボウリング—米国コミュニティの崩壊と再生」
- 2) 稲葉陽二, 大守隆, 金光淳, 近藤克則, 辻中豊, 露口健司, 山内直人, 吉野諒三 (2014), 「ソーシャル・キャピタル「きずな」の科学とは何か」, ミネルヴァ書房
- 3) 高橋征仁 (2013), 「弱い絆の強さ: 沖縄県における原発事故避難レポート」, (『建築雑誌』, Vol.128, No.1646, pp.6-7)
- 4) Dentsu NEWS RELEASE (2011), 「東日本大震災後の父親・母親調査」, <http://www.dentsu.co.jp/news/release/2011/pdf/2011113-0929.pdf>, 2011年09月29日
- 5) 国土交通白書 2012 (2012), 「震災後の国民意識の変化」, <http://www.mlit.go.jp/hakusyo/mlit/h23/hakusho/h24/>
- 6) McPherson, Miller, Lynn Smith-Lovin, and James M. Cook (2001), 「Birds of a feather: Homophily in social networks」, (『Annual review of sociology』, pp. 415-444)
- 7) 岡田豊 (2011), 「過去の震災時の教訓から考える「復興」のあり方—迅速な復興の難しさ」, (『みずほ総研論集』, Vol.3, pp.11-46)
- 8) 岩手日報 (2012), 大規模再開発の影「復興災害」嘆く店主, <http://www.iwate-np.co.jp/311shinsai/saiko/saiko120505.html>, 2012年05月05日
- 9) アジাপレスネットワーク (2013), 「震災地を歩く〜神戸・新長田〜」, <http://www.asiapress.org/apn/archives/2013/01/30073932.php>, 2013年01月30日
- 10) 小谷仁務, 岩堀卓弥, 直田梓, 国領優, 張詩雨, 梶原哲朗, 杉山高志, 藤田陽介 (2013) 「商店街でのおしゃべりがインフラ〜復興から生まれる新しい新長田〜」, (『第47回土木計画学研究発表会・講演集 CD-ROM 公共政策デザインコンペポスター』)
- 11) 神戸新聞 (夕刊) (2008), 「お地藏さんで町おこし」, 2008年8月21日
- 12) 山口洋 (2003), 「社会ネットワーク分析におけるデータ収集法の比較検討」, (『社会学部論集』, Vol.36, pp.105-119)
- 13) 平松闊, 鶴飼孝造, 宮垣元, 星敦士 (2010), 「社会ネットワークのリサーチ・メソッド: 「つながり」を調査する」, ミネルヴァ書房
- 14) Wasserman, Stanley, Katherine Faust (1994), 「Social Network Analysis: Methods and Applications」, Cambridge University Press
- 15) Newman, Mark (2010), 「Networks: An Introduction」, Oxford University Press
- 16) マイケル・S-Y・チウ (安田雪訳) (2003), 「儀式は何の役に立つか—ゲーム理論のレッスン」, 新曜社
- 17) 増田直紀 (2007), 「私たちはどうつながっているのか—ネットワークの科学を応用する」, 中央公論新社
- 18) Coleman, James S. (1988) 「Social capital in the creation of human capital」, (『American journal of sociology』 Vol.94, pp.95-120)